さようなら 和泉功さん

大きな再漏洩もなく、15 年が、何とか経過しましたよ

OWCC 中川和道 20260315

福島原発 F1 の事故から 15 年間、ほぼ毎年、和泉功さんと、花塚山で放射線測定を続けてきた(写真 1-5、図 1)。その和泉功さんが、2025 年 9 月、天に召された。毎年お会いする度に中川と交わしてきた言葉がある。「今年もまた、追加の大きな放射能漏れもなく、ここまでは無事に来ましたね。」今回は、これを書こう。

写真 1. 20140628。Radii による放射線量測定値を携帯に転送・表示・記録する和泉功さん。

写真 2. 20140628 比曽堺。右側の飯館村方面から放射性物セシウムの雲が上ってきた。

和泉功さんは福島登高会の創立会員。2011 年 3 月 11 日の F1 事故で放射能汚染された地元福島の山々にいち早く分け入り、徹底的な放射線計測を始められた [1)]。福島登高会の創立会員には西和文さん(中川の大学時代の先輩)がおられる。西さんは、「山行記録を几帳面につける」という会のあり方を決めたと言われる方だ。労山大阪府連の会長 園敏雄さんが「山行記録を連綿と綴る、創立以来の会の伝統が、放射線計測の結果をまとめた著書『放射線と登山道』[2)]を生んだ」と、東北を支援する大阪府連震災交流集会(20141122)で語られたのを、中川ははっきり覚えている。

写真 3. 20160905 比曽堺。雨の日も測定に。

和泉さんは 2020 年の数年前にガンを患われた。山を登ることが、生命力を高めるのだと、比曽堺の放射線測定にずっとお付き合いいただき、山スキーにも出かけておられた。しかし、2023 年が最後の測定となった(写真 4、5)。あの日々を、中川は決して忘れない。和泉さんは、中川の心の中に、ずっと生き続けていく。2025 年、比曽堺でお線香をあげ、ご自宅のご仏前でそれを誓った。

写真 4.20230922 和泉中川足利

写真 5. 20230922 右から 和泉 足利 大西 中川。これが和泉さん最後の測定写真となった。

2025 年の測定には、福島登高会の阿部会長・柏倉事務局長がご同行下さった(写真 6)。この取り組みがずっと続くことを心から願う。

さて冒頭の「今年もまた、追加の大きな放射能漏れもなく、無事にここまで来ましたね。」について。和泉さんは、大きな地震がもう 1 回来たらまずい、それが心配だとずっと心配なさっておられた。損傷して耐震能力が著しく低下した F1 は再度の大地震には耐えられまい、図 1 の放射線量グラフがどんと上昇する瞬間を私は見たくないのだと、毎年会うたびにおっしゃっておられた。あの地声が忘れられない。

写真 6. 20251030。 福島登高会の阿部会長・柏倉事務局長がご同行下さった

当時の心配のひとつは、1 号機から 4 号機の使用済み核燃料プールだった。地上 30 m ほどもの高さにある数百トンの冷却水プールで膨大な量の使用済み核燃料を冷やし続けないといけない。3・11 の地震でガタガタになった足場のうえに危険な超重量物を抱え、かろうじて立っている。熊本地震みたいに、大きな地震が何度も来たらどうしよう、また、水素爆発か？中川も和泉さんもそれが怖かった。「今年も何とか無事に経過しましたね」と声を合わせたのはこんな理由からだった。

さらに、最近の新聞報道[3]によれば、原子炉本体を支える台座のコンクリートが消失していることが、今頃、初めて明らかになったという。大きな余震が来たら、それこそ危機一髪であった状況を、私たちは天の運だけに恵まれて、たまたま乗り切ってきた。2 人はこのニュースのずっと前から直感的にその危うさを悟り、肝が冷えて、あの原子炉が、ただで済むはずがない、「今年もまた・・(何とか)無事に・・」という言葉になったのだ。

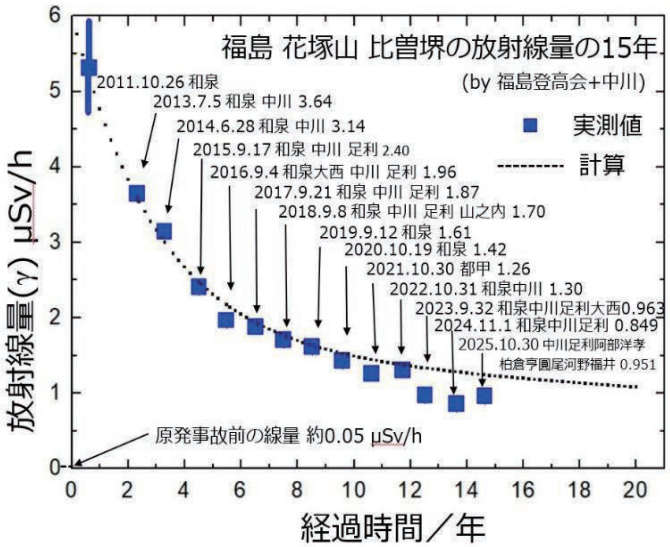


図 1. 比曽堺の放射線量の 15 年。再放出は起こらずここまで来られたと、このグラフを眺めつつ、和泉功さんは語っておられた。

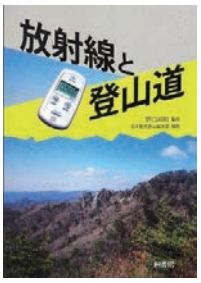
図 1 に示す線量の経過は、2021 年以降、モデル計算からはずれてきている。新たな科学的説明が要求されており、挑戦が待たれている。

大阪では、残念ながら、関心が、はっきり、薄れてきた。フクシマが忘れられつつある。ある山仲間と話したら、福島の人々はもう故郷に帰ったと信じておられた。だが、双葉町での帰還はたった 3%。帰還困難区域(立入禁止区域)の除染は 10%も進んでいない。これが現実だ。厳しい。中川たちは、フクシマを忘れない活動を、微力ながらでも、何とか息長く続けたいと思う。

2026 年も、また、測定に向かう。有志の方、いっしょに行きませんか？

文献・注

[1]聞き及んだところでは、山岳地域の放射線射線量計測を請け負ったある会社から、「切り立った箇所での測定に必要なので、懸垂下降技術を教えて下さい、福島登高会を見込んでお願いします」と頼まれ、基礎の指導をなさったとか。会社の方はその後、いろいろな箇所でのデータを計測されたようですよ、とのことであった。

[2]『放射線と登山道』、監修:野口邦和、編集:日本勤労者山岳連盟、2012 年。

[3] 2026 年 3 月 9 日 朝日新聞、「原発コンクリ消失、謎のまま　福島第一、４年前に「想定外」判明」。